

令和 6 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦 I 期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、国語教師で教育研究者でもある大村はまさんが、今から30年ほど前に行った講話をまとめたものです。大村さんの意見を要約するとともに、あなたがこれまでに受けてきた授業の経験を踏まえた上で、あなたは子どもにどのような指導をしたいと考えるか、600字以内で述べなさい。

「指導する」ということについて、教師から子どもにいろいろ働きかけることについて、遠慮する気風が、戦後たいへん強くなってきました。教師がひとりで話を聞かせる形式も、詰め込み教育のように思われ、遠慮されています。子どもから出てくることばかりに気をとられて、教えるべきことも教えず、指導が疎^{おろそ}かになってきているように思います。つまり「教える」ことを遠慮する雰囲気があります。

私は、ほんとうに、教えずにはだめだと思います。学校は教えるところ、教わり、学ぶところです。学力を養う専門の場所なのです。学校が教えるべきことを教えないことには、子どもは、どこで学力をつけたらいいのでしょうか。教えるということが、即「詰め込み」という誤解から、離れないと困ります。

夏休みには、たいてい、宿題のひとつに、自由に、なんでも好きなこと、やりたいことをやってくるように、というのがあります。自由に、のびのびと、楽しく勉強させたい、好きなことに意欲的に取り組ませたい、というねらいです。もちろん、いいことなのですが、自由に、なんでも好きなこと、やりたいことを、というのは、教師は何もしなくていいということではないと思います。

自由に、と言われて、子どもは案外、当惑するものです。子どもは、ほんとうは、自分が何が好きなのか、何がやりたいのか、何ができるのか十分に分かってはいないのです。ですから、自由に、なんでも、好きなことをとなっても、何をやっていいか、分からないことが多いのです。ぜひ、教師の手びきが要^いるのです。

教師がまず材料をたくさん考えてあって、それも、ただ漠然とした思いつきではなく、この子にこれ、あの子にあれ、と考えてあって、ヒントを出したりして、それぞれの子がやることを見つけるのを、助けなければならないと思います。みんなが、やることを考える時間を設けて、その時間に、ヒントを出したりして指導するのです。

これをやったらどうかと手びきすることを、たくさん持っていて、初めて、そういうことができると思います。そして、それが教えるということです。子どもに自由に考えさせると言って、何もしないのは、自由のはき違い、教えるということを忘れてのことだと思えます。しかも子ども自身は、それを自分で探し、自分で自由に選んだ気持ちで、勉強に入っていかなければなりません。もし、先生から与えられた、あるいは、させられたという気持ちにさせたとしたら、それはヒントを出したりしたときの、教師側の不手際でしょう。

「自由に」というとき、子どもに任せきりでなく、どこまで、どのように手びきするのか、深く考えておきたいと思います。教師はいつの場合でも教えることが仕事なのですから。

(大村はま「日本の教師に伝えたいこと」による・一部省略がある)